

---

# 近代国家解体の論理

---

岡本 清一







はじめに／「繩張り国家」と「主体的国家」／国家を結節点とした近代思想  
 国家からの解放のさけび／国家統合と国家からの離脱／国家と無縁の思想のめばえ／世界的公団と都市的集団

# 近代国家解体の論理

はじめに

近代国家の解体の論理というような、たいへん大きな問題について、私見を述べさせていただくことになりましたが、この雑誌では、こういう途方もない問題でないと調子が合いませんので、力不足もかえりみず、螳螂の斧を探ることにいたしましたわけです。

さて、この大きな問題のどこからどう手をつけていったらよいか、迷わざるを得ませんが、しかし、いま、私たちの国家が一種の解体現象を呈しているということは、ほぼ、だれの目にも、だいたいわかるところ



岡本 清一

京都精華短期大学学長

まできているんじゃないか、というふうに私は思いますが、いかがでしょう。もちろん、私のように、ものを国家の問題としてとらえる習性のあるものには、いま、社会の問題になっているものは、何もかも国家に関係のあるように思えるものでありまして、たとえば一九一八年に、オシュワルト・シュペングレーが『西洋の没落』を書きましたが、私などは、それは結局、国家をつくる精神の没落のことをいおうとしているのではないか、というように考え、また、アーノルド・トインビーが、西洋文明の解体、崩壊などと申しますと、それも十六世紀以後の西洋において成立した近代国家の解体ということを無意識のうちに問題にしているんだというように、考えを進めていくくせがついているのでありま

辻野 氏寄贈